

創世記18章で、アブラハムが、神の忍耐と憐れみに賭けて必死に祈るのを見た。神の正しいさばきから逃れる為に、私達は神の憐みにすがるしかない。アブラハムは、自分の身内のロトの家族の為に必死に執り成しの祈りをした。私達も必死に人々の救いの為に祈りたい。

I 中途半端なロトの信仰とソドムの汚れた罪深さ。19：1。ふたりの御使いが夕暮れにソドムに着いた。ロトは門のところにすわっていた。ロトは罪深い人々と調子を合わせて生活していた。：2→ロトは、二人の御使いを家に迎えようとし、お泊り下さいと言う。ロトの家とアブラハムの天幕は対照的。罪深い町の中で、なお安住しようとするロトの生活を象徴している。：4，5→ソドムの人々がロトの家を取り囲んだ。彼らはロトに向かって叫んだ。「今夜おまえのところにやって来た男たちはどこにいるのだ。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいのだ」：5。「知りたい」とは、男色の罪のこと。性的な放縱。ソドムは最悪の罪の状態だった。それに対してロトは、とんでもない事を言った。「どうか悪いことはしないでください。…私にはまだ男を知らないふたりの娘があります。娘たちをみなの前に連れて来ますから、あなたがたの好きなようにしてください」：7，8。ロトは、父親としての娘を守る責任を放棄している。罪の中にとどまったくロトの信仰的な聖なる判断が、麻痺している事が分かる。私達も、自分の問題として、目を覚まして祈りたい。気づかぬうちに、段々神から離れ、聖なる正しい判断が麻痺する事がないように。ロトの妥協はソドムを選んだ事自体の一つの結末であり、神の御心ではなく、この世の利益を優先させる者の行き着く、道徳的感覚の麻痺だった。私達はどうだろうか？私たち人間が、悪への妥協、道徳的感覚麻痺、靈的な墮落は、急に起こるのではない。悪いと分かっている事から主に祈り決断し離れる事をしないで、するすると中途半端な状況に身を置き続ける時に、悪、罪への妥協、麻痺、墮落が始まって行くのである。私達も目を覚まして祈りたい。知らず知らずのうちに罪、悪に染まり、愛と聖なる主から離れる事がないように。

II：9—11を読みましょう。主は、ロトの麻痺した判断で、ひどいめに会わされそうとしたロトの娘達を、御使い達によって助けられた。私達も、色々な危ない事から今まで守られたのは、主の憐み、守りによる。感謝したい。

III 主のあわれみによる救い。：12—17を読みましょう。1. 「ふたり（御使い）はロトに言った。『…この町にいるあなたの身内の者をみな、この場所から連れ出しなさい。わたしたちはこの場所を滅ぼそうとしているからです。彼らの対する叫びが主の前で大きくなつたので、主はこの町を滅ぼすために、わたしたちを遣わされたのです』：12—13。この世も、いつか罪の故に滅ぼされる時が来る。今、語る機会が与えられているうちに福音を人々に伝えることが出来ますように。「そこでロトは出て行き、娘たちをめとった婿たちに告げて言った。『立ってこの場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。』しかし、彼の婿たちには、それは冗談のように思われた」：14。御使いからのメッセージをロトは婿たちに伝えたが、ロト自身が、そのメッセージを本気で捕えていたか疑問に思える。婿達には冗談のように思われた。これは、今も起る。私たち自身も、御聖霊が心に教えて下さらなければ「あ

「あなたの罪の為に主が十字架で死なれたのですよ」「主は、三日目に死から復活されました」「この世は、神の時に終わりの時が来て、主が再臨され、神がすべてを正しくさばかれ、今の天と地は滅ぼされ、新しい天と地が神によって造られます（Ⅱペテロ3：10—13）」という真実なメッセージを聞いても、冗談のように思われる。しかし、神が、この福音を伝えてくれる人々を私達に遣わされ、御聖霊が、その福音を理解する心と信仰を与えて下さり、主を信じることが出来た。感謝します。だから、私達が、家族、知人に主のことを伝えて冗談のように思われ、すぐには信じてくれなくても、がっかりしないようにしたい。私達の分は、祈りつつ主を伝える事。信仰を与える人を救うのは神の分。しかし、祈りは大切。神は私達が心を合わせ祈り合う時、働いて下さる。祈りのグループで祈り合いたい。諦めないで。2. 「さあ立って、あなたの妻と、ここにいるふたりの娘たちを連れて行きなさい。さもないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまおう。しかし彼はためらっていた」：15, 16。この時点でもロトは「ためらっていた」とある。これは、私達の事を含めて深い事実を教えている。それは、神が喜ばれないとわかっていても、世にある罪、悪には魅力、悪い心を一瞬でも楽しませるものがあるという事である。私達人間は、なぜ、悪に染まり、悪にはまって行くのか？それは、私達の心に罪、悪い事に傾く心があるからである。また、心が、「真に良いもので満たされていないから」である。私達は、神に依存するか、他のものに依存するかである。主は、それらの罪から解放するために、私達を愛し十字架で身代わりに刑罰を受け、三日目に復活し、新しい命、性質と素晴らしい助け主の聖霊とはかない罪の楽しみが与えてくれない「本当の心の満たし」と、互いに愛し合い祈り合う教会を与えて下さる。「わたしを信じる者は…その人の心の奥底から、生ける水の川がながれでるようになる」ヨハネ7：38。3. 彼はためらっていた。「すると、その人たちは彼の手と彼の妻の手と、ふたりの娘の手をつかんだ。一主の彼に対するあわれみによる。そして彼らを連れ出し、町の外に置いた」：16。何という主の恵み、あわれみ！主は、深いあわれにより、罪の場から離れるのをためらっていた彼らの手をつかんで下さり、滅ぼされる町の外に置き、救い出された。私達も、同じ主の深い憐れみの救いを受け続けている事を本日深く感謝したい！私達が、主を信じ洗礼を受ける恵みに与かった事、洗礼を受けた後も、何度も主から離れる誘惑、罪の誘惑があるのに、今、主と教会につながっているのは、主があわれみにより、何度も私達の手をつかみ、悪から離れるのをためらう私達の手をつかみ救い出し続けておられるからである。心から感謝したい。目を覚まして祈り続けたい。4. 「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない」：17。「主はソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天のところから降らせ、…みな滅ぼされた。ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった」：24—26。私達も振り返り、塩の柱になっていたかもしれない。私達も、自らの罪の故に滅んで当然だったのに、神の深い憐れみの故に救われた恵みをいつも覚え感謝したい。と同時に、救われた後も、自分の内にも罪が残っており、罪の生活といううしろを振り返らせ、神から引き離そうとする悪魔の誘惑がいつもあるので、いつも目を覚まして祈りたい。一人では弱いので、二人、三人で心を合わせて祈り合いたい。「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ」哀歌3：22。